

謝罪研究の概観と今後の課題ー日本語と英語の対照研究を中心とした考察ー

大谷 麻美

詳細目次

1. はじめに
 - 1.1. 本研究の目的
 - 1.2. 考察の範囲
 - 1.3. 謝罪の定義
2. 謝罪の普遍的特徴に関する研究
 - 2.1. 謝罪の行為特徴に関する研究
 - 2.1.1. 社会学の観点からの研究
 - 2.1.2. 発話行為論の観点からの研究
 - 2.1.3. 意味論の観点からの研究
 - 2.1.4. ポライトネスの観点からの研究
 - 2.2. ストラテジーに関する研究
 - 2.3. まとめ
3. 個別言語における謝罪研究
 - 3.1. 謝罪の定型発話・表現とその機能に関する研究
 - 3.2. 謝罪に影響を与える文脈上の変数に関する研究
 - 3.3. 人間関係に与える効果に関する研究
 - 3.4. 談話構造に関する研究
 - 3.5. 恩恵を受けた場面での「すみません」の研究
 - 3.6. まとめ
4. 日本語と英語の対照研究
 - 4.1. 謝罪を普遍的なものとして考える研究
 - 4.1.1. ストラテジーに関する研究
 - 4.1.2. 謝罪の有無やストラテジーの選択に影響を及ぼす要因に関する研究
 - 4.1.3. 話者の状況認識に関する研究
 - 4.2. 謝罪を言語個別のものとして考える研究
 - 4.2.1. 発話の行為特徴に関する研究
 - 4.2.2. Face management に関する研究
 - 4.2.3. 人間関係に与える効果に関する研究
 - 4.2.4. 社会規範に関する研究
 - 4.2.5. 謝罪と感謝との関連に関する研究
 - 4.3. まとめ
5. 今後の課題と展望

稿末注
参考文献

謝罪研究の概観と今後の課題

— 日本語と英語の対照研究を中心とした考察 —

大谷 麻美

要 旨

本稿は、日・英語間の謝罪の対照研究の成果を概観し、その結果から今後の課題を考察するものである。まず、対照研究の前提となる主な謝罪研究の成果をまとめる。その後、日本語と英語を対照した研究の成果を概観する。

日・英語間の謝罪の対照研究は、これまで様々な側面から多様な方法で行われてきた。しかし、謝罪に影響を与える変数があまりにも多く、また、それらが複雑に絡み合っているために、研究数が多い割にはその成果がまとまっていないことが問題と考えられる。本稿では、それらの研究成果を、謝罪を言語を超えた普遍的な行為とみなす研究と、言語ごとに個別性を持つ行為と考える研究とに整理し概観する。そして今後に残された課題が何であるのかを考察する。

【キーワード】 謝罪、 日本語、 英語、 発話行為、 普遍 (性)、 個別 (性)

1. はじめに

1.1. 本研究の目的

謝罪とは、共通の言語を持つ話者同士の間でも円滑に遂行するのは難しい発話行為といえる。ましてや、異なる言語文化を持つ者の間ではなおさらである。異言語・異文化を持つ話者の間では、謝罪をめぐる誤解や問題が生じることはしばしばである。そして、それらは時にはコミュニケーションや人間関係の破綻につながり、また国際的な問題に発展することすらある(e.g., Murata 1998; 遠藤 2000)。このような問題が生じやすい原因としていくつかが考えられる。一つには、謝罪が各言語文化の価値観や規範と複雑に結びついていることが挙げられる。そのため、たとえ謝罪の言語形式(e.g., “I’m sorry”, “すみません”)を知っていても、その言語文化での価値観や規範を理解していなければ、それらを適切な場で適切な方法で用いることができないとは限らないからである(Coulmas 1981)。さらに、もう一つの原因としては、謝罪は受け手がそれを受け入れてはじめて成立する行為であることが考えられる。たとえ、いくら送り手が適切に行ったつもりでも、受け手側がそう解釈しなければ謝罪は完了したことはない。したがって、送り手と受け手の言語文化が異なる場合、その疎通が同じ言語話者間以上に困難になるのである。

謝罪が人間関係の修復や維持に直接かかわる行

為であり、社会関係の重要な部分を担う行為である点を考えると(e.g., Goffman 1971; Brown & Levinson 1987)、異なる言語文化間の誤解や問題を回避して円滑なコミュニケーションを行うためには謝罪を言語間で対照し、その特徴を明確にすることはきわめて重要な課題である。そこで、本稿は、異文化間での謝罪の対照研究、とりわけ先行研究が多く、かつその言語距離が大きいとされる日本語と英語の対照研究に焦点をあて、その動向を概観する。その上で、今後の研究課題を考察する。

1.2. 考察の範囲

これまでの謝罪研究を、調査の対象となっている言語で分類すると、大きく以下のように分けることが出来る。

1) 謝罪の普遍的な特徴を明らかにしようとした研究

特定の言語を対象とはせず、謝罪の行為やストラテジーなどを概括することで、その普遍的な特徴を明らかにしようとする研究。

2) 個別言語に焦点を当てた研究

ある特定の言語を対象とし、その言語の謝罪の行為特徴、表現、ストラテジー、談話構造、謝罪に影響を与える文脈上の変数などを明らかにしようとする研究。

3) 二言語（もしくはそれ以上の言語）間の対照研究

二言語、もしくはそれ以上の言語間で謝罪を様々な角度から対照することで、それぞれの言語での謝罪の特徴をより明確にしようとする研究。また、それぞれの言語文化の価値観や規範との関係を明らかにしようとする研究。

4) 謝罪の習得研究

言語学習者の謝罪発話や談話の特徴を明らかにすることで、学習者の母語と学習言語間の相違点、習得の困難点、指導方法などを明らかにしようとする研究。

本稿では、上記の 3)の二言語間、特に日本語と英語の対照研究の概観が主な目的である。しかし、そのために、まず、その前提となっている 1)と 2)の分野の研究の概観から始める。4)の習得研究に関しては、対照研究への示唆が大きいとは考えられるが、日本語と英語に関するものが未だ少ないため本稿では取り扱わない¹⁾。

1.3 謝罪の定義

先行研究では、謝罪の定義は実に様々であり、そのため、その調査対象も多様である。例えば「I apologize」という行為遂行動詞に着目した研究(e.g., Austin 1962; Searle 1969)や、「I'm sorry」「すみません」などの謝罪の定型的な発話を中心に捕らえたもの(e.g., Owen 1983)、謝罪の具体的なストラテジーに着目したもの(e.g., Fraser 1981; Holmes 1990, 1995)、受け手に視点を置き受け手が謝罪と感じたものは全て謝罪とみなすもの(e.g., Davies, Merrison & Goddard 2007)などがある。しかし、謝罪研究のもっとも大きな問題は、そもそも「謝罪とは何か」というその定義が問われている点である(Davies et al. 2007)。本稿がこれまでの研究動向を多角的に概観してその問題点と課題を考察するレビュー論文であるという点を考えると、ここであらかじめ謝罪を定義してその概観の範囲を狭めてしまうことは適切ではないと考える。そこで、本稿では謝罪を定義することはあえて避け、各論文の筆者の定義で「謝罪」「apology」として扱われた発話とそれに伴う行為²⁾をすべて対象として概観を行う。その結果、従来の研究で「謝罪」がどのように考えられてきたのか、そして、今

後どのように考えられてゆくべきであるのかを考察することとする。

2. 謝罪の普遍的特徴に関する研究

本節では、謝罪を普遍的な行為と考えてその特徴を一般化して示そうとした研究と、それに対する批判を概観する。それらの主なものは、謝罪という行為そのものを明らかにしようとする研究と、行為の言語表出に焦点を当ててどのような言語ストラテジーで謝罪を遂行するのかに着目した研究である。

2.1. 謝罪の行為特徴に関する研究

2.1.1. 社会学の観点からの研究

後の社会言語学の立場からの謝罪研究に一つの新たな視点を与えた研究として Goffman(1971)を挙げることができる。この研究は、社会学の立場から社会生活(public life)を規定する規範を明らかにしようとしたものである。そして、我々の生活の中では、何らかの違反行為(infraction)³⁾が生じたときには、修復行為(remedial work)を行うことが規範となっていると指摘した。そして、謝罪をその修復行為の一つとして取り扱っている。Goffman は修復行為を、ある行為を無礼な(offensive)ことから受け入れ可能な(acceptable)ことに変えることと定義している。また、謝罪については、侵害(offence)に対して罪の意識を感じている(guilty)ことを示すことであり、また、違反行為(delict)から身を引き、ルール違反をしたことを認めることだと定義した。そして、そのための具体的な形式として以下の五つを挙げている。1)困惑と無念さを表明すること、2)本来はどうすべきであったかを理解し、また、罰則が与えられても仕方がないと認めること、3)誤った行為や自己を言葉で否定すること、4)正しい行為を支持すること、5)償いや補償を遂行すること(1971: 113)。この研究は、主に彼自身の属するアメリカや西洋社会の規範に基づいているため、必ずしも普遍的とはいえない。また、謝罪表現や謝罪発話そのものに焦点を当てているわけでもない。しかし、謝罪を社会的な秩序を維持するための規範、相手との関係を修復する行為としてとらえたことは、その後の社会言語学が謝罪を相手との関係性の中での相互行為として分析してゆくための重要な基盤を提供したといえる。

2.1.2. 発話行為論の観点からの研究

従来の発話の研究が命題文を中心としたものであったのに対して、発話を行為として考察し、その

行為の特質や適切性について考察したのが Austin(1962)らに端を発する発話行為論である。そして、謝罪もこの発話行為の一つであり、発話行為論の観点からの謝罪研究は、適切な謝罪とはどのような行為であるのかを一般化しようとする試みであったといえる。Austin は “I apologize” という発話を対象として、謝罪が適切に遂行されたと認められるための条件として以下を挙げた。

- (1) it is true and not false that I am doing (have done) something — actually numerous things, but in particular that I am apologizing (have apologized);
- (2) it is true and not false that certain conditions do obtain, in particular those of the kind specified in our rules A.1 and A.2;
- (3) it is true and not false that certain other conditions obtain of our kind *I*, in particular that I am thinking something; and
- (4) it is true and not false that I am committed to doing something subsequently.

(Austin 1962: 46)

- | | |
|----------|---|
| Rule A.1 | There must exist an accepted conventional procedure having a certain conventional effect, that procedure to include the uttering of certain words by certain persons in certain circumstances, and further, |
| Rule A.2 | the particular persons and circumstances in a given case must be appropriate for the invocation of the particular procedure invoked |

(Austin 1962: 15)

さらに、Searle(1969)は Austin の理論をさらに発展させ、発話内行為を一般化して説明するモデルとして適切性条件を提案した。Searle 自身は謝罪に関しての適切性条件は明示していない。しかし、後に山梨(1986)が Searle のモデルに基づき謝罪の適切性条件を以下のように提示した。

Apologize (x, y, P):

- i. 命題: P は x による過去の行為
- ii. 準備: x は自分の行為が y にマイナスであると信じている

- iii. 誠実: x は自分の行為を悔いている
- iv. 本質: x は自分の行為に対するその気持の表出
(x: 話し手, y: 聞き手, P: その発話に内包される命題内容) (山梨 1986: 49)

このような適切性条件は、謝罪という行為が適切に遂行されるための条件を記述することで謝罪という行為の特徴を抽象的に一般化したものだといえる。それまで厳密に定義されていなかった謝罪という行為を一般化してみせた点でその意義があるといえる。

しかし、一方で、このような発話行為論の適切性条件は、実際の謝罪には当てはめることが困難であるという批判も多い。たとえば、Thomas(1995)は、上記のような適切性条件は遂行動詞(謝罪に関していえば ‘apologize’)の意味を記述しているに過ぎないと批判している。そして、実際に日常生活の中を見渡せば、この条件に当てはまらない謝罪がいくらかでも見つかることを指摘している。その一例として、謝罪の送り手が、自分の行為ではない配偶者や子供などの身内の行為に代わって謝罪を行うことも珍しくないことを挙げている。また、謝罪の対象となっている行為が必ずしも聞き手にマイナスになっていない場合もいくらかでもあるとしている。その上で、このような規則性は、きわめて限られた状況にのみ当てはまるものであり、日常生活の多くの例を排除してしまうと批判している。

また、Murata(2002)は、Austin や Searle の謝罪の条件の問題点を指摘している。謝罪をめぐるイギリスと日本の国家間の誤解を分析した結果をデータとして用い、これらの適切性条件が非常にあいまいである点、また、話し手の意図だけを焦点としており聞き手の解釈を視野に入れていない点、謝罪が理解される過程の文化的な多様性が考慮されていない点などを問題として指摘している。その上で、多くの先行研究の結果を鑑みて、さらに少なくとも新たに五つの下位条件を加えることを提案している。具体的には、違反行為(violation)の程度、期待される謝罪のタイミングと回数、謝罪の送り手と受け手、謝罪に伴う保障、謝罪の媒体に関する条件である。そして、このような sociopragmatics の視点からの条件提示が重要であると指摘している。

発話行為論からの謝罪研究は、その行為が適切に行われるための条件を示すことで謝罪という行為を

定義しようとしたものといえる。しかし、その一般化のあまり、社会言語学者らが指摘するように、具体的な個別言語ごとの相違や、日常会話の中での謝罪の多様性などを排除したという大きな問題点をはらんでいたといえる。

2.1.3. 意味論の観点からの研究

一方、上記のような発話行為論からの研究に対して、意味論の観点から ‘apologize’ という動詞の意味を問い直した研究もある。Fillmore(1971) は、発話行為論の適切性条件には、発話の前提となる状況に関する条件と、発話の illocutionary force に関する条件とが混在していると指摘した。そして、‘apologize’ を含めた様々な英語の遂行動詞の意味を、presuppositional な側面と illocutionary な側面とに分けて表記しようと試みた。

2.1.4. ポライトネスの観点からの研究

Brown & Levinson(1987)は、ポライトネスの観点から謝罪を定義した。彼らは、謝罪とは、送り手が犯した face threatening acts(FTAs フェイスの侵害行為⁴⁾のせいで受け手の negative face を脅かしたことを残念に思う気持ちを伝え、その FTAs を和らげようとするものであると定義している。そして、謝罪は、謝罪の送り手の positive face を脅かす行為であり、一方で、受け手にとっては negative face を脅かされる行為であると説明した。このポライトネス理論は、西洋文化の視点に基づくもので必ずしも全ての言語に当てはまるわけではないという批判もある(e.g., Matsumoto 1988; Ide 1989)。しかし、それまでの多くの研究が送り手の発話のみに焦点を当ててきたのに対し、Goffman 同様に送り手と受け手の双方の相互行為として謝罪をとらえているため、より広い視野で謝罪を見ているといえる。そのため、後述の謝罪研究にも大きく影響を与えている。

2.2. ストラテジーに関する研究

言語学の観点からは、普遍的な謝罪のストラテジーを具体的に記述しようとする試みが見られた。ここではその主な研究として Fraser(1981)、Olshtain & Cohen(1983)を挙げる。

Fraser (1981)は、Goffman に基づいて謝罪を remedial work の一つと定義した。そのうえで、謝罪とは二つの行為を行うこと、つまり、不快な行為(offensive act)に対して責任を取る行為と、犯した違反(offense)に対して後悔の念(regret)を伝える行為であると定義している。そして、このような謝罪を行

うためには何を言えばよいのかを考察した。そして次の九つのストラテジーを具体例とともに提示した。

- Strategy 1 Announcing that you are apologizing
“I (hereby) apologize for...”
- Strategy 2 Stating one’s obligation to apologize
“I must apologize for...”
- Strategy 3 Offering to apologize
“I (hereby) offer my apology for...”
- Strategy 4 Requesting the hearer accept an apology
“Please accept my apology for...”
- Strategy 5 Expressing regret for the offense
“I’m (truly/very/so/terribly) sorry for...”
- Strategy 6 Requesting forgiveness for the offense
“Please excuse me for...”
- Strategy 7 Acknowledging responsibility for the offending act
“That was my fault”
- Strategy 8 Promising forbearance from a similar offending act
“I promise you that that will never happen again”
- Strategy 9 Offering redress
“Please let me pay for the damage I’ve done”
(Fraser 1981: 263)

さらに、これらのストラテジーの選択に影響を与える要因として、1)違反行為の性質、2)違反の深刻さ、3)違反が起こった状況、4)会話参加者の親しさ、5)謝罪者の性別などが影響していると考えた。Goffman の考察の対象が “I’m sorry” に焦点を当てた狭いものであったことを批判して、この研究はより広い範囲で謝罪の発話を明らかにしようとしたものだといえる。“I’m sorry”だけではなく、それに続く発話にまで視野を広げた点と謝罪ストラテジーが選択される要因にまで言及した点で、従来の発話行為論の抽象性を脱却しようとした試みである。

Olshtain & Cohen(1983)は、理論としての発話行為を、データに基づいた経験的研究の視点でとらえ直すという試みであり、また、談話との関係の中で捉えなおそうとする試みでもあった。まず、彼らは謝罪を、社会規範に違反する行為を犯したときに「状況を正常な状態に戻す(set things right)」(1983: 20)ことと定義した。そして、発話行為を semantic

formula (意味公式) の集合体と考え、次のような五つの semantic formula を挙げている。

1. An expression of an apology
2. An explanation or account of the situation
3. An acknowledgement of responsibility
4. An offer of repair
5. A promise of forbearance

(Olshtain & Cohen 1983: 22)

このような謝罪のストラテジーの分類は、他にも Trosborg(1987)などにも見ることができる。これらの考察は、発話行為論が単一の発話に焦点をあてて謝罪を分析していたのに対し、談話レベルで謝罪をとらえようとしている点で、より実際の謝罪に近づこうとした研究である。特に、Fraser は謝罪ストラテジーの選択を規定する要因を挙げたことで、実際の謝罪が文脈の様々な変数によって複雑に選択されていることを示した。

2.3. まとめ

これらの研究は、謝罪という行為とその言語ストラテジーの普遍的特徴を明らかにしようとする試みであった。発話行為という概念を導入したことで、謝罪は単なる言語形式から言語行為としてとらえられるようになっていった。しかし、これらの研究は、言語ごとの個別性には関心を払わなかった。そのため、その後には、3 節で述べるようにそれぞれの言語ごとの詳細な研究が行われてゆくこととなった。

3. 個別言語における謝罪研究

80 年代以降は、それぞれの言語ごとに謝罪の特徴を明らかにしようとする研究が見られるようになった。本節では、一つの言語に焦点をあて、その謝罪の特徴を分析した研究の主なものを概観する。これらの研究の調査対象は大きく分けて五つに分類できる。謝罪の発話や表現に関するもの、謝罪に影響する文脈上の変数に関するもの、謝罪の効果に関するもの、謝罪の談話構造に関するもの、恩恵場面での謝罪に関するものである。ここでは、後の節との関連で、特に日本語と英語に関するものに限定する。しかし、英語の謝罪に着目した研究は、日本語のそれと比較すると多くはない。4 節で概観するように、英語の謝罪はむしろ英語圏以外の研究者によって、彼らの母語との対照研究の中で明らかにされてゆく

ことが多い。

3.1. 謝罪の定型発話・表現とその機能に関する研究

この分野の研究は、その多くが日本語についてのもので、英語に関してのものはほとんど見つからなかった。これは、日本語の謝罪の定型発話(表現)が多様で、しかも、多機能であるのに対し、英語の場合は表現も機能も比較的限定されているからだと考えられる。

熊取谷(1988)は、日本語の詫び⁵(と感謝)の慣用表現(e.g., 「すみません」、「遅くなりました」、「おじやまします」、「私が悪うございました」)を発話内行為として捕らえて、その特徴を適切性条件に当てはめて分類した。その結果、日本語のほとんどの詫びの慣用表現が、適切性条件の中のいずれかの箇所か発話媒介意図を言語化したものであることを明らかにした。抽象的な発話行為論と具体的な謝罪表現の関連を明らかにし、また、日本語の多様な謝罪表現がなぜ謝罪として成立しうるのかを説明した。

一方、森山(1992)は、謝罪やお礼の場面でのコミュニケーションを「関係修復のコミュニケーション」と命名した。そして、日本語の関係修復のコミュニケーションで使用される定型表現を分類し、日本語での関係修復の方略を四つ抽出した。そして、それらを外国語の方略と対照することで、ほぼ普遍的なものであることを示した。ただ、日本語の特徴としては、「相手に負担をかけてはいけない」(1992: 276)という規制が変数として強く働くために謝罪の表現がお礼に使用されうのだと結論付けている。

住田(1992)は、謝罪の際に使用される日本語の典型的な発話 (e.g., 「すみません」、「ごめん」) を「詫びのあいさつことば」と呼び、その機能を調査している。データとして、大学生の談話資料を使用した。その結果、「詫びのあいさつことば」が陳謝以外にも、ねぎらい、問いかけ、依頼・断りの前置きなどとして機能している点、さらに談話の切り出しや切り上げなどの談話進行上の機能としても働いていることを指摘した。

Ide(1998)は、自然会話の録音データを分析し、そこに見られる日本語の「すみません」の機能を分析した。その結果、謝罪以外にも依頼のマーカ、注目要求、いとま請いなどの七つの機能を果たしていることを明らかにした。そして、これらの機能は、

決して別々な機能ではなく、それぞれの機能が互いに重複し合う部分を持つと指摘した。さらに、Goffman の remedial/supportive interchange の枠組みで分析すると、「すみません」は単に remedial な機能だけではなく、supportive な機能としても働くことを指摘し、談話の中でのその機能の多様性を明らかにした。

3.2. 謝罪に影響を与える文脈上の変数に関する研究

謝罪の行い方に影響を与えている文脈上の様々な変数について調査した研究は、後述する対照研究に多い。ここでは英語の謝罪に関する Holmes(1990, 1995)の研究を概観する。

Holmes(1990)は、ニュージーランド英語の 183 の謝罪のインタラクションを対象に、その文脈上の変数と、そのストラテジー、意味・統語構造、コンテキストとの相関を分析した。Holmes は、Goffman に基づき、謝罪を受け手の face に向けたもので、送り手に責任がある違反(offence)を修復し双方の均衡を回復する発話行為と定義した(1990: 159)。その結果、謝罪のストラテジーに関しては、単独の謝罪ストラテジーを使用する場合よりも、いくつかのストラテジーを組み合わせる使用が多いこと、また、そのストラテジーの選択は「明示的な謝罪の表明+説明・理由」「明示的な謝罪の表明+責任の表明」が圧倒的であることを明らかにした。そして、そのストラテジーの選択には、「違反の深刻さ」、「相手との親しさ」や「力関係」などの変数が複雑に影響をしていることを示した。特に「相手との親しさ」については、「見知らぬ人」、「友人」、「親友・家族」の間では、「友人」に対して入念に謝罪を行うことが示された。これは、ポライトネスのストラテジーは「相手との距離(D)」「力関係(P)」と比例するという Brown & Levinson の主張に反するものであった。一方で、Wolfson(1988)の bulge model(社会的距離の非常に遠い人と非常に近い人に対してはよく似た行動をとり、中間の人に対してもっとも有標な行動をとるというモデル)にあてはまることを明らかにした。

さらに Holmes(1995)は、上の研究と同じ定義とデータを用いて、ニュージーランド英語の謝罪が男女の間でどのように異なるかを分析した。その結果によると、女性は、男性以上に謝罪を頻繁に行っており、和を重んじるストラテジーを用いていた。そ

れに対して男性は、自分の face loss や相手との地位に焦点を当てたストラテジーを用いており、謝罪の対象が女性とは異なり、また謝罪の受け手が女性とは異なっていた。その上で、男女間では謝罪の解釈が異なると指摘している。男性の謝罪は自分の不適切さ(inadequacy)を認める行為で、できれば避けたい行為であるのに対し、女性の間、特に女性同士の友人の間では、謝罪は相手の face への配慮であり、友人の間では重要な役割を担うものであるとしている。そして、男性の謝罪は、Brown & Levinson のポライトネスモデルに一致して違反の重大さや相手との距離に比例して行われるものであるのに対し、女性の謝罪は上記の Wolfson のモデルに近いものだと述べている。

英語を対象にした研究では、謝罪に影響するこれら文脈上の変数にはあまり関心は払われていなかった。しかし、Holmes の研究は、日本語と比較すると相手との距離や力関係の影響を受けにくいと考えられがちな英語でも(井出、荻野、川崎 & 生田 1986)、実際にはそれらが謝罪方法に大きく影響を与えていることを明らかにした。また、謝罪を文脈の中で見て、その多くの変数を考慮に入れなくては謝罪の実態が見えてこないことを示唆した。

3.3. 人間関係に与える効果に関する研究

何のために謝罪をするのかという問題に、従来の研究とは異なる視点を示した研究が Kotani(1999)と Davies, Merrison & Goddard(2007)である。

Kotani(1999)は、日本人が謝罪をどのように認識しているのかを明らかにするために、日本人大学生に詳細なインタビューを行い、その談話を分析した。その結果、日本人は、自らの責任を感じていなくても謝罪を行うこと、その理由として日本人にとっての謝罪とは「人を良い気分させること(making people feel good)」(1999: 146)であることが多いことを明らかにした。つまり、日本人の謝罪とは、相手が何かの違反(offense)をこうむっていることに気づいて心配してみせ、その結果、相手を良い気分させることであり、必ずしも悪事(wrongdoing)の責任を取ることでないということである。特に、謝罪の対象が些細な問題(minor problematic situation)である場合にはその傾向が強いことを指摘した。

また、Davies et al.(2007)は、イギリス人大学生から教員への謝罪の email をデータにし、謝罪の対象と構造を分析した。この論文では、受け手が謝罪と

判断した表現は全て謝罪とみなして分析を行った。その結果、そこに見られた謝罪は、Brown & Levinson によって言われるような、受け手の face を守り送り手の face を脅かす行為とは必ずしもなっておらず、むしろ送り手の face を高める行為となっていることを指摘した。具体的には、謝罪の送り手の学生が「良い学生」を演じるためにあえて謝罪を行い「自分の株を上げる(self-enhancement)」行為をしている場合が多かった。つまり、謝罪が自己の確立(identity construction)のために行われる場合があることを明らかにした。

これらの研究は、他の多くの研究で指摘されているような、謝罪が「責任の自認」によって「関係の修復」をはかる効果以外にも、実際の文脈の中では多様な効果を果たしうること示している。

3.4. 談話構造に関する研究

Robinson(2004)は会話分析の手法を用いて、adjacency pair(隣接ペア)の中での謝罪の位置を調べることでその特徴をとらえようとした。Robinson はアメリカとイギリスの自然会話をデータとし、その中で'sorry'や謝罪の行為遂行動詞(e.g., apologize)を含んだ明示的な謝罪(explicit apologies)に着目した。そして、これらの謝罪の発話が、一般に考えられているような adjacency pair のはじめの発話に必ずしもなるとは限らないことを指摘した。さらに、その場合は、その発話は単なる謝罪以上に、違反を犯す行為そのものを内包していることを指摘した。また、明示的な謝罪への返答にも着目した。好んで使用される返答(preferred response)は、謝罪の緩和(mitigation, undermine)であり、具体的には謝罪を許す発話(e.g., "That's all right")や謝罪への不同意の表明(e.g., "No")であることを指摘した。また、好まれない返答(dispreferred response)としては、謝罪を是認(endorse)する返答で、具体的には謝罪の認定(e.g., "Right")や謝罪への同意(e.g., "Yeah")などであった。この研究は、他の多くの研究が謝罪の送り手側の発話だけに着目しがちなのに対し、その返答も調査対象とすることで、謝罪の談話の構造に迫ろうとした点でそれまでになかった研究であろう。受け手が謝罪を受け入れて初めて謝罪が完結する点を考慮すると、今後はこのような、受け手の反応を含めた談話構造の研究が必須といえる。

3.5. 恩恵を受けた場面での「すみません」の研究

Coulmas(1981)は、日本語の謝罪表現と考えられ

ている「すみません」が、恩恵を受けた場面(以下、恩恵場面)で用いられるメカニズムを示した。Coulmas は、西洋では一般に異なる発話行為と考えられている謝罪と感謝には、その背後に共通して負い目(indebtedness)の意識があると指摘した。それによると、感謝は利益(benefit)を受けた負い目を含意し、謝罪は相手に落ち度(fault)を与えた負い目を含意するという点で類似しているというのである。日本人が恩恵を受けた際に「すみません」を使用するのは、自分の喜びよりも相手の骨折り(trouble)に視点を置いて負い目を示すからであると指摘した。さらに、thanks と apology の区別はあくまでも西洋の区別であり、「すみません」の例が示すように、一つのコミュニティの発話行為が他の文化でも普遍的とは限らないことを指摘した。この研究の成果は、対照語用論の立場から、西洋の謝罪と感謝の概念が必ずしも他の言語文化に普遍的に当てはまるとは限らないことを指摘した点である。

3.6. まとめ

以上の日・英語それぞれの謝罪に関する研究には、大きく二つの傾向が見られる。一つは、発話行為論などで述べられた謝罪の行為特徴を各言語の中で確認しようとするもの、つまり、謝罪の普遍性をそれぞれの言語の中で確認する研究である。例えば、熊取谷や森山の研究は、日本語の謝罪表現が、指摘された適切性条件や他言語の謝罪方略と一致を見ることを確認する研究である。また、一方で、各言語の独自の特徴を明らかにすることで、その言語での謝罪がそれまで考えられてきた謝罪の枠に収まりきらないことを指摘して、その個別性を示す研究もある。例えば、Ide, Kotani, Davies et al., Coulmasなどはこちらに属する。

4. 日本語と英語の対照研究

次に、日・英語を比較対照することで、双方の謝罪の特徴を明らかにしようとした研究を取り上げる。これらの研究でも大きく分けると3節で述べた二つの傾向が見られる。一つは、謝罪を普遍的行為と考え、しかし、その運用面でそれぞれの文化の規範や価値観の影響を受けていると考える研究である。これらの研究は、日・英語を比較することで、それぞれの謝罪のストラテジーの相違、その相違に影響を与える文脈上の要因、話者の状況認識の仕方などを明らかにしようと試みている。一方、謝罪という

行為の個性を明らかにしようとし、双方の言語間での謝罪という行為のずれを指摘しようとする研究もある。これらの研究では、謝罪の行為特徴やその目的が言語間で異なる点を明らかにしようとしている。本節では、普遍性志向と個性性志向の研究に分類し、それぞれの研究を概観する。

4.1. 謝罪を普遍的なものとして考える研究

4.1.1. ストラテジーに関する研究

Sugimoto(1999b)は、日・英語で用いられる謝罪のストラテジーがどのように相違するかを明らかにしようとした。日本人とアメリカ人大学生を対象に、謝罪が生じそうな場面でどのような反応をするかを尋ねる質問紙調査を実施した。その結果、両者ともに「後悔のことば(statement of remorse)」、「釈明(account)」、「損害についての表現 (description of damage)」、「埋め合わせ (reparation)」の順でストラテジーが使用されるという共通点が見られた。一方、相違点はその使用割合で、「釈明」を行う割合はアメリカ人が日本人以上に多いのに対して、それ以外のストラテジーは日本人のほうが多用していた。これは、言語でその使用傾向に差はあるものの、先に述べた Fraser や Olshtain & Cohen の挙げたストラテジーが両言語に見られることを示すものである。

また、同じストラテジーでも話し方に違いが見られた。日本人のほうが「精密なスタイル (elaborated style)」で「言葉を多く用いる(verbose)」ことが明らかとなった。また、一般的に日本人のコミュニケーションスタイルは間接的であるといわれがちであるが、Sugimoto は、謝罪に関しては日本語は非常に直接的であるとしている。

4.1.2. 謝罪の有無やストラテジーの選択に影響を及ぼす要因に関する研究

一方、単なるストラテジーの相違だけではなく、謝罪の形式、ストラテジー、要・不要の判断などに影響を与える文脈上の変数などの要因を明らかにしようとした研究は多い。

Tanaka(1991)は、「相手との社会的距離」、「相手との力関係」、「事態の深刻さ」、「謝罪の対象」、「責任の有無」が謝罪の形式にどのように影響を与えているのかを調査した。調査対象は日本人とオーストラリア人の大学生で、調査方法は、設定した場面について、あらかじめ録音しておいた相手の発話に対してロールプレイを行う方法であった。その結果、日本人は「相手との社会的距離」、「相手との力関

係」、「事態の深刻さ」に反応していくつかの apology formula(謝罪形式⁶)を使い分けるのに対し、オーストラリア人の apology formula の選択に影響を与えている変数は「事態の深刻さ」であった。また、日本人は、自分に直接責任のない家族(配偶者、子供)の行為についても謝罪を行うが、オーストラリア人にはその傾向は少なかった。特に配偶者の行為に対しては、両者の反応の差が顕著であった。ただ、この研究の問題点は、これらの変数の重み(距離の大きさ、事態の深刻さなど)が筆者の判断によるものである点である。調査対象者が本当に「距離がある」「深刻である」などと判断したかどうか、また、両言語話者間にその認識の違いがありはなかったかという点に疑問の余地が残る。この疑問は、後の Sugimoto(1999a, 2001)の研究によって裏付けられる。

Tanaka(1999)は、上記の調査の 10 年後⁷にその追跡調査を行っている。その目的は、日本の若者の行動パターンが変化していることを受けて、自分に責任がない行為に対して謝罪をする日本人が 10 年前と比較して減ったという仮説を検証することであった。対象は日本の大学生で、調査方法はアンケート形式で、設定された場面で各自が取と思う行動を尋ねるものであった。その結果、1991 年の研究結果と比較していくつかの場面では日本人が謝罪を行わなくなっていることが明らかとなった。さらに、謝罪の際に自分の主張をすべきではないという日本語の規範に反して、自己主張する若者が少なからずいることを示した。

また、Tanaka, Spencer-Oatey & Cray(2000)は、上記の Tanaka(1999)の調査をさらに発展させ、対象を日本人、イギリス人、カナダ人と広げ、話し手に責任が無いいわれのない非難に対して謝罪を行うか否かを調査した。対象者は上記 3 カ国の大学生で、調査形式は 8 つのシナリオに対して自分が言うと思う発話を答えさせる調査紙調査であった。その結果は、自分に非のない場面では日本人はイギリス人、カナダ人と比較しても謝罪の頻度が低いというものであった。この結果は、従来日本人は自分に非がなくても謝罪を多用するというステレオタイプに反するものである。Tanaka らは、このようなステレオタイプとは異なる結果が出た理由について、一つは調査対象が大学生であった点、もう一つは設定場面の問題などを挙げている。しかし、この結果は、一

般的な日本人のステレオタイプとは相違するものの、Tanaka(1999)が示した「若い世代の日本人は責任の無い場面では謝罪をしない傾向がある」という結果と一致する。

Taki(2003)は、Tanaka(1999)の研究と同様に、話し手の世代によって謝罪方法が異なるのかを調査した。調査対象は20歳の若年層と60歳代の熟年層のイギリス人と日本人であった。彼女は Discourse Completion Test (DCT)、スケールテスト、インタビューを組み合わせ、各世代と言語グループで、文脈上の変数(力関係、違反(offence)の深刻さ)が謝罪方法に影響を与えるのか否かを分析した。その結果、イギリスの熟年層が日本の熟年層以上に力関係に影響を受けやすいことを明らかにした。さらに、日本人の若年層の謝罪の戦略はイギリス人若年層の戦略と類似しており、説明と釈明を用いることを示した。Taki は、その要因として日本人の若年層が西洋化され、従来なら西洋のコミュニケーションスタイルと指摘されていた直接的な表現(direct expression)を用いるようになってきたからだとしている。しかし、この研究は、各グループの被験者が1-2名ずつで、合計でも7名しか対象にしない点に疑問が残る。そのため、この結果を一般化するには、更なる調査が必要であるといえよう。

Okumura & Li(2000)は、言語文化による self の概念の違いが謝罪の行い方に影響を与えていると考えた。そこで、社会心理学で用いられる Twenty Statements Test(TST)を用いて、日・英語話者の self の概念を明らかにすることで、両者の謝罪の戦略の相違の要因を説明しようとした。調査対象はイギリス人と日本人の 30-45 歳の女性である。TST の結果、両者は異なる self の概念を持つことが明らかになった。日本人女性の self は「集団志向の私的な(group-oriented private)」ものであるのに対し、イギリス人女性の self は「独立した公的な(independent and public)」ものであった。それと並行して謝罪場面を設定したアンケート調査を行ったところ、両者の謝罪方法にも違いがみられた。まず謝罪の対象に関しては、日本人女性はイギリス人女性以上に自分の身内(夫、子供)が起こした事態に対して謝罪を行っていた。さらに戦略については、イギリス人は相手との社会的距離が離れるにつれ強調表現(e.g., 'terribly', 'awfully')を用いる傾向が強いものの、シンプルで明示的な謝罪を行ってい

た。それに対し、日本人は親しい友人に対しては多くの戦略を用いて入念に謝罪を行うが、それより距離が離れると(e.g., 上司、見知らぬ人)その傾向は少なくなっていた。そして、この結果を日本人とイギリス人の self の概念が異なることに起因していると結論付けた。この調査は、Tanaka(1991)でも示された、日本人が家族の行動について代わって謝罪を行う原因の説明となっている。ただ、調査対象者が女性だけであるため、Holmes(1995)が指摘したように男女間で謝罪方法に違いがあるとなると、この結果をイギリス人・日本人全体の傾向といえるかどうかの今後の調査が必要であろう。

これらの研究から言えることは、ひとつは、謝罪の行い方には世代という要因が関係していそうであるということである。さらに、もう一つとしては、話者の責任の有無が謝罪の有無に影響を与える要因となっている点である。Tanaka, Okumura & Li が指摘するように日本人が家族の行為に対して謝罪するという結果は、先に挙げた Kotani の結果とも一致し、これも話者の責任の有無が関係していると考えられる。だとすると、なぜ日本人が責任の有無に関係なく謝罪をするのかについては、さらなる調査が必要であろう。

4.1.3. 話者の状況認識に関する研究

謝罪を行うか否か、また、行うとすればどのように行うかは、謝罪者のその場の状況の認識の仕方に大きく左右される。しかし、場面状況の認識や解釈は文化によって相違する可能性がある。Sugimoto(1999a, 2001)は、日本人とアメリカ人の謝罪スタイルが異なるという先行研究の結果を受け、その一因として両者の状況の認識の仕方に相違があるのではないかと仮定した。そして、謝罪が生じそうな場面を設定し、その状況をどう判断するかを調査した。対象は日本人とアメリカ人の大学生で、様々な場面を設定したアンケート調査を用いて、各場面での調査対象者の認識判断を9ポイントのスケールで答えさせた。

その結果、両言語話者の大きな違いとして、次の二つの興味深い結果を示した。まず、日本人はアメリカ人以上に、相手が怒っているだろうと見積もる傾向があった。特に、「被害(damage)に対する怒り」と「加害者(offender)に対する怒り」を比べた場合、日本人は「加害者に対する怒り」をより大きく見積もっていた。また、違反(offence)の深刻さに

についても、同じ場面でも日本人のほうがより深刻に見積もる傾向が強いことを示した。そして、筆者は、日本人に謝罪が多い要因の一つはこのような状況認識の傾向に要因があると指摘している。このことは、これまで多くの調査(e.g., Tanaka 1991, 1999)に見られたように、調査者が自らの判断で「違反の大きさ」「責任の有無」などを判断して調査を行ったとしても、調査対象者が必ずしもその通りに状況を認識したとは限らないことを示唆しており、調査のあり方そのものに対する見直しをせまるものである。

4.2. 謝罪を言語個別のものとして考える研究

一方、謝罪という行為が全ての言語に一樣に普遍的なものではなく、言語ごとでその行為そのものにずれが見られるのではないのかと考える研究もある。これらの研究では、謝罪の有無や言語表出として見られるストラテジーの違いは、この根本的な行為の特徴の相違から生じるものではないのかと考え、謝罪行為そのものを問い直している。

4.2.1. 発話の行為特徴に関する研究

中田(1989)は、日本語では「相手の自発的な尽力」も陳謝の対象となる事実を踏まえ、日本語と英語の陳謝が、山梨が提示した謝罪の適切性条件に一致するのかどうかを検証した。データに日本語と英語(85%がアメリカ、残りがイギリスとオーストラリアの英語)の映画とテレビのシナリオを用いた。陳謝の発話として「すみません」、「ごめんなさい」、「I'm sorry」、「Excuse me」などを抽出し、それらの対象、謝罪の送り手、受け手などの項目を適切性条件と照合した。その結果、英語の陳謝の発話はおおむね適切性条件を満たすものであった。しかし、日本語に関しては、相手がしてくれた行為に対して用いる陳謝はこの条件には当てはまらなかった。そこで、恩恵場面に適合する新たな適切性条件セットを提示した。

この研究は、日本人であれば感覚的に理解している恩恵を受けた場面の「すみません」のような謝罪が、英語に実際に全く見られない事実をデータに基づいて明らかにした点、Searle らが唱えた発話行為論が英語にはうまく一致しても日本語には必ずしも一致しないことを検証した点、日本語の恩恵場面での謝罪に当てはまる適切性条件を新たに示した点で興味深い。

大谷(2004)は、発話行為論の立場から、日本語と英語では謝罪という行為にずれがあると考えた。そ

して、謝罪がその送り手の心理(e.g., 責任感、後悔の念、負い目)に基づく行為である点に着目し、両言語の謝罪がどのような心理を基盤とした行為かを明らかにしようとした。日本人とアメリカ人を対象に、設定場面での発話を調べる DCT と、その時の心理状態を問う心理要因スケールテストを併用し、謝罪を行う場面でどのような心理を強く感じているのかを調査した。その結果、日本人は謝罪を行う際に、相手の「迷惑」を意識しているのに対し、アメリカ人は自分の「責任」を強く意識していることが明らかとなった。先の研究で、山梨は謝罪を「悔いているその気持ちの表出」(下線部は本稿筆者による)と定義しており、Fraser は「不快な行為(offensive act)に対して責任を取る行為と、犯した違反(offense)に対して後悔の念(regret)を伝える行為」(下線部は本稿筆者による)であると定義していた。このように、先行研究では、多くの場合、悔い(remorse)、後悔(regret)、責任(responsibility)が謝罪の鍵となる心理だとされてきた。しかし、日本語の謝罪は「相手が迷惑をこうむった」という認識を表明する行為であり、必ずしも「責任」や「悔い」の気持ちに基づく行為ではないこと、一方で、英語の謝罪は「責任」を認める行為であることを指摘した。その上で、日本語と英語の謝罪の適切性条件をそれぞれ新たに提示した。

さらに、その両者の心理の相違が謝罪の談話にも現れていることを明らかにした。たとえば、「すみません」「Sorry」などの定型的な発話に続く談話として、日本人は「怪我をさせちゃいましたね」など受け手の「迷惑」を意識した発話が多いのに対し、英語では“I did something stupid”“I didn't mean it”など自己の「責任」を認めたり、逆に自己の「責任」を否定したりする発話が多く見られた。

発話行為論では、謝罪を含めた発話行為に文化的な差異を認めず一般化を行ってきたが、この研究は謝罪の適切性条件を言語文化ごとに問い直してみる必要性を示し、また、その適切性条件のずれによって、談話の特徴の相違も説明が可能であることを示した。

4.2.2. Face managementに関する研究

Kumagai(1993)と池田(1993)は、日本語と英語の謝罪のインタラクションを比較することで、両言語話者が謝罪の送り手と受け手の face をどのように守ろうとするのかを考察した。両者とも Goffman と

Brown & Levinson に基づき、謝罪を何かの違反 (offence)によって相手の face を脅かし、その脅かしを修復する remedial work の一部と定義している。

Kumagai は日本とアメリカの TV ドラマや映画のシナリオをデータとして用い、そこに現れる remedial interaction のストラテジーの種類、ターン数、ストラテジー配置、相手の反応などを分析した。その結果、両言語話者間では、使用されるストラテジーに相違が見られた。日本人は自らの責任を表明し、その状況に関して意見を述べ、相手への思いやりを示すコメントを述べていた。それに対し、アメリカ人は釈明を行い、間投詞や address term 等を用いる emotional/interpersonal なストラテジーを多用することが明らかとなった。しかし、日本人は多くのターンを用いるものの使用しているストラテジーの種類は少ないこと、一方、アメリカ人は日本人と比べターンは少ないが使用ストラテジーが多いことが明らかとなった。これは、日本人の場合、謝罪が受け入れられた後でも同じストラテジーを何度も繰り返して人間関係の回復を図ろうとするのに対し、アメリカ人は多様なストラテジーを用いて釈明を行いながら問題を解決してゆこうとするからだと説明した。そのため、日本人の謝罪は、自らの face を犠牲にして謝罪の受け手の face を守ろうとする reciprocal face-support を行っているのに対し、アメリカ人の謝罪は、問題を解決することで自分の face と受け手の face の両方を守ろうとする self-supporting な機能を持つとしている(表 1)。

一方、池田(1993)は、日本人とアメリカ人の大学(院)生を対象として、設定した場面でのどのように行動をするかをたずねる質問紙調査を実施した。その結果は Kumagai(1993)と非常に類似したものであった。アメリカ人は、日本人以上に説明や弁明を行い、補償の申し出をすることが明らかとなった。また、

アメリカ人が複数のストラテジーを使用して謝罪を行うのに対し、日本人は使用するストラテジーが少なく、謝罪表明だけで終わる場合も少なくなかった。池田はこの理由として、日本人は謝罪の受け手の face を尊重して人間関係の調和を保つことを重視するのに対し、アメリカ人は送り手と受け手の各々の face を維持することが重要で、謝罪は問題解決重視であるとし、Kumagai と一致する結果となっている。しかし、この Kumagai と池田の結果は、先に述べた Tanaka(1999)と Taki(2003)で明らかになった、日本人も釈明のストラテジーを用いて自己主張をするという結果とは相容れないものである。これは、調査対象者の世代、場面設定、ストラテジーの分類方法などの違いにより影響を受けているのかもしれない。

4.2.3. 人間関係に与える効果に関する研究

Barnlund & Yoshioka(1990)は、日本人とアメリカ人を対象に二つの調査を行った。一つは、謝罪対象や謝罪についての認識についてのインタビュー調査で、もう一つは謝罪に影響を与える文化的変数と言語形式との関連を見るアンケート調査である。この研究では謝罪を routine なものと genuine なものに区分している。そして、前者の例として、会話の口火として使用される “Excuse me”や同情を示す “I’m sorry”などを挙げている。また、後者としては、相手を害した(harmed)という認識を持ち、それに対して直接的あるいは間接的な責任を感じて義務感を持つて行う行為と定義している。その上で、本研究では後者の謝罪を調査対象としている。

先ザインタビュー調査では、日本人とアメリカ人とは謝罪対象が異なることを明らかにした。日本人は、任務の失敗(32%)、自分の能力不足(30%)、時間の誤り(27%)などに対して謝罪を行うのに対し、アメリカ人はマナーの悪さ(50%)、自分の能力不足

表 1 The major differences between Japanese and American remedial mode (Kumagai 1993: 298)

	Japanese	American
Relative emphasis	restoring relationship	solving the problem
Approach	penitent utterances humble	explanatory utterances self-expressive
Negotiation mode	empathetic	rational
Face-management by apologizer	self-threatening (reciprocity expected)	self-supporting

(20%)、任務の失敗(15%)に対して謝罪を行うことが明らかとなった。さらに興味深い点は、謝罪を行った後の人間関係に対する認識の違いである。日本人は謝罪を行った後、相手との人間関係は「同じ」(85%)か「悪くなる」(10%)と認識しているのに対し、アメリカ人は、「同じ」(45%)か「よくなる」(35%)と考えている。

さらに、後半のアンケート調査の結果では、日本人とアメリカ人が用いる謝罪の形式(form)⁸に違いが見られるとしている。どちらの言語でもまず“I am very sorry”⁹のように直接的に謝罪を述べる点は同じであるが、その後の形式の選択に違いが見られ、日本人は補償を申し出るのに対し、アメリカ人は説明(explanation)を行うことを指摘している。

これらの結果から、日本人の謝罪は人間関係を回復する戦術(tactic)であるのに対し、アメリカ人の謝罪は人間関係を向上させる戦術であるとしている。そして、このような謝罪に期待する効果の違いと、そのために選択される謝罪形式の違いは、和を重んじる日本の文化と、自己表現と自発性を重んじるアメリカの文化の違いから説明が出来るとしている。このアメリカ英語の結果は、先に述べた Davies et al. が、イギリス人の謝罪が「自分の株を上げる」効果を持つとした結果と一致しており、これまで指摘されてこなかった英語の謝罪の効果といえるのかもしれない。また、アメリカ人が謝罪において説明を重視するという結果は、上記の Kumagai、池田の結果とも一致するものである。

4.2.4 社会規範に関する研究

Sugimoto(1998)は、日本語とアメリカ英語の謝罪の背後にある社会規範を明らかにするために、日・米の礼儀作法の本 34 冊に見られる謝罪の行い方の記述を比較した。その結果、日本語での理想的な謝罪は「素直な」謝罪であり、一方、アメリカ英語の理想的な謝罪は‘sincere’な謝罪であると指摘した。Sugimoto は「素直な」とは、「関係性に対して誠実であること(relational truthfulness)」であり、「無私の降伏(selfless surrender)」であると定義している。一方、‘sincere’とは「物理的な現実(physical reality)」を基本としており、‘sincere’な謝罪とは「責任(responsibility)」や「自責の念(remorse)」を含むものだとしている。その上で、この両者の基本的な規範の違いのために、両言語では期待される謝罪の方法が異なるとしている。例えば、日本語の謝罪では、

内容よりも形式に沿ってパターン化された表現を用い画一的であること(conformity)が重要であり、規範からそれることは好まれない。そのため、同じ発話を繰り返すことは、むしろ規範からそれないために重要であると説明する。一方で、アメリカ英語では、‘sincerity’を伝えるためには、即時に独自のメッセージを伝えることが大切であるとする。また、関係を修復したいという真の気持ち(genuine intent)を示し、また釈明(account)を通じて真実を伝えることも重要と考えられる。この研究は、日本語と英語の理想的な謝罪という行為が根本的な部分で不一致であるという主張をしており、その意味では、アプローチは全く違うものの、上記の中田や大谷の研究の主張と方向性が同じといえる。

4.2.5 謝罪と感謝との関連に関する研究

三宅(1993a)は、日本人とイギリス人を対象に、詫び表現と感謝表現がどのような心理状態のときに使用されるのか、また、どのような変数がこれらの表現の選択に影響を与えるのかを調査した。調査方法は、あらかじめ設定した場面で使用する表現と心理を尋ねる質問紙調査であった。その結果、同じ場面でも日本人はイギリス人より「詫び心理」持つ場合が多く、両者の間にはそもそもの視点に相違があることを示した。その上、言語表現に関しては、日本人は「感謝心理」を持つ場面でも「詫び表現」を使用することが多く、イギリス人にはこの様な使用例は見られなかった。また、日本人が「感謝心理」を持っているにも係わらず「詫び表現」を使用する場合は、相手の地位・年齢が高い場合が多いことが明らかとなった。この結果より、英語の話者は心理がそのまま表現の選択に反映されるが、日本語の場合は、詫び・感謝表現の選択には相手との関係性が決定要素となることを示した。

また、三宅(1993b)では、上と同じデータを用い、詫び・感謝表現とともに使用される付加表現¹⁰がどのような視点からの表現であるかを分析することで、日・英の「詫び」「感謝」の言語行動をつかさどる社会規範を明らかにしようとした。まず、設定した場面の話者の心理を分析し、次に、それぞれの心理を持つ際どのような視点からの付加表現を使用しているかを分析した。その結果、表2のような結果が出た。日本人が感謝の気持ちを持っているときには自分の利益に着目しているのに対し、イギリス人は相手の好意に着目している。また日本人が詫びの気

表 2 日本人とイギリス人の心理、視点、具体的表現

言語	心理	視点	表現例
日本語	感謝の気持ち	自分の利益に着目	「本当に助かりました」
	詫びの気持ち	相手の負担に着目	「大丈夫でしたか」
英語	感謝の気持ち	相手の好意に着目	“You’ve saved my life”
	詫びの気持ち	自分の過失に着目	“It was so stupid of me.”

(三宅(1993b)の結果を大谷がまとめたもの)

持ちを持っているときには相手の負担に着目するのに対し、イギリス人は自分の過失に着目する。この詫びの気持ちの相違は、先に挙げた大谷の結果にも見てとれるものである。そして、イギリス人の詫びの視点が「過失」である以上、恩恵を受けた場面で詫び表現が使用されにくいのはもっともである。

これらの三宅の研究は、日本語の謝罪(詫び)の行動は、英語の謝罪の枠組みだけで捉えていては説明できないことを指摘し、そこに新たな説明を加えようとするものである。

以上、日本語と英語の謝罪の対照研究を概観した。表3はそれらをまとめたものである。

4.3. まとめ

以上、日本語と英語の謝罪の対照研究を概観した。その結果、いくつかのことが明らかになった。一つは、両言語では、謝罪という行為が必ずしも全く一致している行為ではなく、ずれが見られるという点である。大谷や三宅が述べるように、両言語ではその行為の基盤となる話者の心理や視点に違いが見られる。そのために、三宅や中田が指摘するように、英語であれば感謝が使用される状況に対しても謝罪が行われるのだと考えられる。また、その結果、謝罪に期待される効果も、Kumagai、池田、Barnlund & Yoshioka が指摘するように、日本語の場合は人間関係を回復することが重要であるのに対し、英語の場合は問題解決や自分の株をあげることである例も見られ、相違しているようである。そして、このことから、好まれる謝罪の戦略や形式の違いも説明できるようである。

一方で、これらの根本的な相違以外に、外的要因として、Tanaka や Tanaka et al.らが指摘するような相手との距離や力関係などの影響が両言語間で異

なると考えられる。しかし、Tanaka、Tanaka et al.、Okumura & Li が指摘しているような、日本人が自分に責任のない行為に対して謝罪する傾向は、むしろ三宅、中田、大谷、Kumagai、池田らが指摘する英語との謝罪行為のずれによって説明できるのではないであろうか。

さらに、Tanaka らが指摘するように、世代間で謝罪の行い方に相違がみられるのであれば、より長い目でその移り変わりを見てゆく必要があり、また、若い世代が考える謝罪がどのようなものであるのかを明らかにしてゆくことが必要であろう。

5. 今後の課題と展望

以上、日本語と英語の謝罪の対照研究と、その前提となる主な謝罪研究を概観した。そこでひとつ明らかになることは、Austin、Searle らの発話行為論によって謝罪という行為が一般化されて示されたものの、その後の研究の動向はむしろ一般化とは逆に言語文化ごとの謝罪の多様性、個別性の解明へと向かってきたことである。2 節で概観した謝罪行為の普遍的特徴に関する研究の多くは、1960 年代から 80 年代前半に行われている。しかし、80 年代以降は、その関心は 3、4 節で述べたような個別言語の特徴の研究へと移っている。これに関して Coulmas(1981:81)は、発話行為の普遍性に次のように疑問を呈している。“...we should not assume that names of speech acts of individual languages define universal types of speech acts.” また、Blum-Kulka、House & Kasper (1989)は、発話行為の研究で物議をかもしている点は「普遍性」対「文化ごとの個別性」の問題であると指摘している。このように、発話行為の普遍性に疑問が投げかけられ始めたのである。

「普遍性」を支持する立場の研究は、発話行為は普遍的なものであるが、ただその表出の仕方が言語文化ごとに異なるという考えである。本稿で概観した日本語と英語の対照研究で見ると、謝罪の普遍性に基づいて行われた研究は、Sugimoto(1999a, 1999b, 2001)、Tanaka(1991, 1999)、Tanaka et al. (2000)、Taki(2003)などであろう。これらは、謝罪の行為そのものを問うのではなく、戦略の選択などに影響を与える変数や状況認識の違いを考察している。一方、「個別性」を支持する研究は、言語はその文化や価値観と密接に結びついたもので、

表3 本節で取り上げた日本語と英語の対照研究のまとめ

	研究者	調査対象 言語	データ収集方法	主な焦点	結 果
1	Sugimoto (1999b)	米・日	質問紙調査	ストラテジー	① 恐でストラテジーは類似するが、①は入念なスタイルを使用し饒舌で直接的
2	Tanaka (1991)	豪・日	ロールプレイ	謝罪形式に影響を 与える変数	① 「社会的距離」「力関係」「深刻さ」に影響される。家族に代わって謝罪する ② 「深刻さ」に影響される
3	Tanaka (1999)	日	質問紙調査	責任のない行為へ の謝罪、世代差 Tanaka(1991)の追 跡調査	① 責任のない行為に対する謝罪は減少 自己主張の増加
4	Tanaka et al. (2000)	英・加・日	質問紙調査	責任のない行為へ の謝罪	① 責任のない行為に対しての謝罪は、①・②に比べて多くない
5	Taki (2003)	英・日	質問紙調査 インタビュー	謝罪方法に影響す る変数と世代差	① 熟年 ② 若年 ③ 「力関係」に①以上に敏感 ④ ①・②で類似のストラテジー使用 ⑤ ③若者の西洋化
6	Okumura & Li (2000)	英・日	質問紙調査	ストラテジーと self	① group-oriented & private self ⇒ 友人に入念なストラテジー 身内の行為について謝罪 ② independent & public self ⇒ シンブルなストラテジー 社会的距離が離れると謝罪を 強調
7	Sugimoto (1999a, 2001)	米・日	質問紙調査	状況認識の違い	① ①は「被害者の怒り」「違反の深刻さ」を①よりも大きく見積もる
8	中田 (1989)	米・英・ 豪・日	TV・映画のシナリオ	感謝場面の陳謝	① ① 従来の適切性条件に不適合・新たな追加条件を提示 ② ② 従来の適切性条件に適合
9	大谷 (2004)	米・日	質問紙調査	話者心理と適切性 条件	① ① 相手の迷惑の認識を示す行為 ② ② 自分の責任を認める行為
10	Kumagai (1993)	米・日	TV・映画のシナリオ	ストラテジーと Face management	① ① restoring relationship self threatening ② ② solving the problem self-supporting
11	池田 (1993)	米・日	質問紙調査	ストラテジーと Face management	① ① 受け手のfaceの尊重 人間関係の調和重視 ② ② 送り手を受け手のfaceを尊重 問題解決重視
12	Barnlund & Yoshioka (1990)	米・日	インタビュー 質問紙調査	謝罪効果とストラ テジー	① ① 人間関係回復の戦術 補償の申し出 ← 和を重んじる文化 ② ② 人間関係向上の戦術 説明 ← 自己表現と自発性重視の文化
13	Sugimoto (1998)	米・日	礼儀作法の本	謝罪の社会規範	① ① 素直な謝罪 → 関係性に対する誠実さと無私の降伏 → 繰り返しを用いたパターン化された謝罪 ② ② sincere な謝罪 → 物理的な現実を重視し責任や自責の念を重視 → 即興的独創的メッセージ
14	三宅 (1993a)	英・日	質問紙調査	感謝場面の心理と 文脈上の変数	① ① 相手との関係性が表現の選択に影響 ② ② 送り手の心理が表現の選択に直結
15	三宅 (1993b)	英・日	質問紙調査	視点と付加表現	① ① 感謝：自分の利益に着目 詫び：相手の負担に着目 ② ② 感謝：相手の好意に着目 詫び：自分の過失に着目

発話行為に必ずしも普遍性は認められないという考えである。例えば本稿の中では、中田(1989)や大谷(2004)は発話行為論の一つのよりどころにしながらも、日・英語の謝罪の行為特徴のずれを指摘している。また、両言語間での謝罪の face management の違いを指摘した Kumagai(1993)と池田(1993)、また Sugimonot(1998)も両言語の謝罪という行為そのものの差異を示そうとしている。

これらの点からもわかるように、日本語と英語の謝罪の対照研究において今後最も重要な課題は、次の2点であると考ええる。一つは、それぞれの両言語の謝罪がどのような行為でどのような効果をもたらすのかをより明確にすることである。もし、そこに言語ごとに個別性が見られる行為であるとすれば、どの部分が両言語間で相違するのが明らかにされなくてはならない。さらに、もう一つは、その上で、それぞれの言語でその謝罪を遂行するにあたり、影響を与える文化ごとの外的な要因を両言語間で対照することである。これら双方の視点からの研究が集積することで、両言語の謝罪の全体像が明らかになると考えられる。

次に、今後これらの課題を解決するためには、まずインタラクシオンレベルからの分析が必要である。従来の研究では、その調査対象はほとんどが謝罪の送り手の発話や談話であった。しかし、謝罪とは、受け手に受け入れられて初めて達成される行為である。その点を考えると、受け手の反応や、送り手-受け手間の相互行為を無視することは出来ない。送り手がいくら適切に謝罪を行ったつもりでも、それが本当に適切であったか否かは受け手の反応を見なければ判断できない。しかし、この点に着目した研究は未だほとんどない。大谷(2008)は英語の謝罪のインタラクシオンをケーススタディーとして分析しているが、日本語との対照にまでは至っていない。

さらに、データの質を考え直す必要がある。上記の研究の中で、自然会話をデータとして扱ったものはほとんどない。多くが DCT、質問紙調査、ロールプレイ、TV シナリオ、インタビューの分析である。これは、謝罪の生データを取ることが極めて困難なためである。なぜなら、多くの場合、謝罪は予測できないときに突然生じるからである。予測ができれば普通は謝罪をしなくてはならないような事態を回避しようとする。また、謝罪は送り手にとっては自分の face を脅かす場合が多いので、録音など

をされたくないケースが多い。このデータ収集の困難さのためにこれまで調査紙などに頼らざるを得ず、結果的にインタラクシオンデータを取ることもできなかった。しかし、自然なインタラクシオンを分析するためには、自然会話、あるいは極力それに近いデータを取ることが不可欠であると考ええる。

さらには、感謝の研究の必要性を挙げなくてはならない。日本語に特徴的な、恩恵を受けた場面で使用される「すみません」などを考察するためには、謝罪の研究だけではなく、謝罪と感謝を照合することで、その双方の実態を明らかにする必要がある。Coulmas は、感謝と謝罪を異なる発話行為と二分して考えることは、日本語にはうまく当てはまらず、「すみません」が謝罪か感謝かと考えること自体が、すでに西洋の枠組にとらわれていることになると指摘している。これまで行われてきた感謝と謝罪についての研究では、圧倒的に謝罪の研究が多く、特に英語の感謝に関する研究は日本語のそれと比較すると驚くほど少ない。しかし、両言語の感謝の実態が明らかになれば、そこから謝罪もより明確になると考えられる。

また、日・英語の対照研究では、英語自体の多様性も無視は出来ない。本稿で扱った論文の中だけでも、少なくともイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドと5カ国の英語がデータとして用いられていた。当然、これらの英語の間にも相違があらわれると予想される。しかし、この課題はほとんど手付かずで残っている。

以上、先行研究に基づいて謝罪研究の今後の課題を提案した。異なる言語・文化間で誤解を生じることなく円滑なコミュニケーションを進めてゆくためには、今後これらの課題の解決が急務であると考ええる。そして後に、その研究成果が次世代の言語教育や異文化理解教育に応用されてゆくことを願ってやまない。

注

1. 本論文の文献は、他の論文の参考文献などを参考にしながら数年をかけて収集を行った。
2. 研究の中には、発話だけではなく弁償や自殺なども謝罪の一種として扱っているものがあるため、ここでは「行為」も含めることとする。
3. 謝罪の前提となる行為を指す表現は研究者により異なる。「迷惑」、「侵害」、「損害」、offense、violation、infracton などの語が使用されることが多い。本稿では、

概観する各論文でその筆者が用いた表現をそのつど使用する。

4. Face(フェイス)の詳細については、Goffman (1967)とBrown & Levinson(1987)を参照のこと。
5. 熊取谷は「謝罪」ではなく「詫び」という語を用いている。そのため、ここでは筆者にあわせて「詫び」を用いる。以下でも、「謝罪」以外の語が用いられている論文については、筆者の用いた語をそのつど使用する。
6. Tanaka は apology formula を、‘an expression which is considered formulaic or fixed as ‘apology’ in Japanese or in English’ (Tanaka 1991: 38)と定義している。
7. Tanaka(1991)の調査は 1986 年に、Tanaka(1999)の調査は 1997 年に実施された。
8. Barnlund & Yoshioka は strategy という語は使用せず form を用いているが、その具体的な内容は多くの研究で指摘されている謝罪のストラテジーと一致している。
9. 日本語については、どのような発話を直接的と判断したのかについての説明はない。
10. 謝罪や感謝の慣用表現とともに用いられる様々な表現を付加表現と定義している。

参考文献

- 池田理恵子 (1993)「謝罪の対照研究：日米対照研究—face という視点からの一考察—」『日本語学』12(11), 13-21.
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子 (1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合—』南雲堂
- 遠藤織江 (2000)「日本の戦争責任を謝罪することば」『社会言語科学』3(1), 51-64.
- 大谷麻美 (2004)「謝罪と感謝の日・英対照研究—話し手の心理からの考察—」お茶の水女子大学人間文化研究科博士学位論文
- 大谷麻美 (2008)「謝罪はどのように遂行され、どのように解釈されたのか—英語の謝罪談話のケーススタディー—」『社会言語科学会第 21 回大会発表論文集』64-67.
- 熊取谷哲夫 (1988)「発話行為理論と談話行動から見た日本語の「詫び」と「感謝」」『広島大学教育学部紀要』2(37), 223-234.
- 住田幾子 (1992)「日本語の詫びのあいさつことば：女子学生の言語生活における談話資料をもとにして」『梅光女学院大学日文学会 日文学研究』28, 235-243.
- 中田智子 (1989)「発話行為としての陳謝と感謝：日英比較」『日本語教育』68, 191-203.
- 三宅和子 (1993a)「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム：Coulmas(1981)の indebtedness「借り」の概念からの社会言語学的展開」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8, 19-38.
- 三宅和子 (1993b)「視点の観点からみた「感謝」と「詫び」：慣用表現とともに使われる表現：日英比較」『東洋大学短期大学紀要』25, 203-214.
- 森山卓郎 (1992)「関係修復のコミュニケーション：現代日本語のお礼とお詫びの定型表現」藤森ことばの会(編)『藤森ことば論集』清文堂出版 270-292.
- 山梨正明 (1986)『発話行為』大修館書店
- Austin, J. L. (1962) *How to do things with words*, Oxford: Oxford University Press. (坂本百大(訳) 1978『言語と行為』大修館書店)
- Barnlund, D. C. & Yoshioka, M. (1990) Apologies: Japanese and American styles, *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 193-206.
- Blum-Kulka, S., House, J. & Kasper G. (1989) Investigating cross-cultural pragmatics: An introductory overview, In S. Blum-Kulka, J. House & G. Kasper (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Request and apologies*, Norwood, NJ: Ablex Publishing Company, 1-34.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Coulmas, F. (1981) “Poison to your soul” thanks and apologies contrastively viewed, In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech*, Hague: Mouton, 69-91.
- Davies, B. L., Merrison, A. J. and Goddard, A. (2007) Institutional apologies in UK higher education: Getting back into the black before going to the red, *Journal of Politeness Research*, 3, 39-63.
- Fillmore, C. J. (1971) Verbs of judging: An exercise in semantic description, In J. C. Fillmore, & D. T. Langendoen (Eds.), *Studies in linguistic semantics*, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 272-289.
- Fraser, B. (1981) On Apologizing, In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech*, Hague: Mouton, 259-271.
- Goffman, E. (1967) *Interaction ritual*, New York: Anchor Books.
- Goffman, E. (1971) *Relations in public: Microstudies of the public order*, New York: Basic Books.
- Holmes, J. (1990) Apologies in New Zealand English, *Language in Society*, 19(2), 155-199.
- Holmes, J. (1995) *Women, men and politeness*, London: Longman.
- Ide, R. (1998) ‘Sorry for your kindness’: Japanese interactional ritual in public discourse, *Journal of Pragmatics*, 29, 509-529.
- Ide, S. (1989) Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness, *Multilingua*, 8, 223-248.
- Kotani, M. (1999) A discourse analytic approach to the study of Japanese apology: The “feel-good” apology as a cultural category, In N. Sugimoto (Ed.), *Japanese apology across disciplines*, Commack, NY: Nova Science Publishers, Inc., 125-154.

- Kumagai, T. (1993) Remedial interactions as face-management: The case of Japanese and Americans, 湯元昭南・桜井雅人・馬場彰(編)『松田徳一郎教授還暦記念論文集』研究社 278-300.
- Matsumoto, Y. (1988) Reexamination of the universality of the face: Politeness phenomena in Japanese, *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426.
- Murata, K. (1998) Has he apologized or not?: A cross-cultural misunderstanding between the UK and Japan on the occasion of the 50th anniversary of VJ day in Britain, *Pragmatics*, 8(4), 501-513.
- Murata, K. (2002) Interpreting an apology: A problem of uptake, 『早稲田大学教育学部学術研究』 50, 1-15.
- Okumura, K., & Li, W. (2000) The concept of self and apology strategies in two cultures, *Journal of Asian Pacific Communication*, 10(1), 1-24.
- Olshtain, E., & Cohen, A. D. (1983) Apology: A speech-act set, In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*, Rowley: Newbury House Publishers, 18-35.
- Owen, M. (1983) *Apologies and remedial interchanges: A study of language use in social interaction*, Berlin: Mouton Publishers.
- Robinson, D. J. (2004) The sequential organization of "explicit" apologies in naturally occurring English, *Research on Language and Social Interaction*, 37(3), 291-330.
- Searle, J. R. (1969) *Speech acts: An essay in the philosophy of language*, Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊(訳) 1986『言語行為: 言語哲学への試論』勁草書房)
- Sugimoto, N. (1998) "Sorry we apologize so much": Linguistic factors affecting Japanese and U.S. American styles of apology, *Language and Internationalism*, 8(1), 71-78.
- Sugimoto, N. (1999a) Perceptions of situations requiring apology in Japanese and the U.S., In N. Sugimoto (Ed.), *Japanese apology across disciplines*, Commack NY: Nova Science Publishers, Inc., 103-123.
- Sugimoto, N. (1999b) A Japan-U.S. comparison of apology style, In N. Sugimoto (Ed.), *Japanese apology across disciplines*, Commack NY: Nova Science Publishers, Inc., 79-104.
- Sugimoto, N. (2001) Evaluation of apology episodes in Japan and the U.S., *Ferris Studies*, 36, 59-35.
- Taki, Y. (2003) Culture and politeness: Differences of apology strategies of the British and Japanese people—Comparison of young and older subjects—, *Studies in Language and Literature*, 22(2), 27-63.
- Tanaka, N. (1991) An investigation of apology: Japanese in comparison with Australian, *Meikai Journal Faculty of Language and Cultures*, 4, 35-53.
- Tanaka, N. (1999) Apology re-visited: Some cultural differences between English and Japanese, *Meikai Journal Faculty of Language and Cultures*, 11, 23-44.
- Tanaka, N., Spencer-Oatey, H. & Cray, E. (2000) 'It's not my fault!': Japanese and English responses to unfounded accusations, In H. Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking*, London: Continuum, 75-97.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction*, London: Longman.
- Trosborg, A. (1987) Apology strategies in natives/non-natives, *Journal of Pragmatics*, 11, 147-167.
- Wolfson, N. (1988) The bulge: A theory of speech behaviour and social distance, In J. Fine (Ed.), *Second language discourse: A textbook of current research*, Norwood, NJ: Ablex, 21-38.

おおたに まみ／奈良大学
cb4y-okur@asahi-net.or.jp

A review of research on apology

— Japanese and English cross-cultural comparisons —

OTANI Mami

Abstract

This paper surveys the literature on apology, especially those studies focusing on Japanese and English cross-cultural comparisons. Apology is one of the most difficult speech-acts for non-native speakers of a target language to perform, and can be a major cause of intercultural miscommunication. A number of studies, therefore, have been done on various aspects of apology. Two main views found in the literature are also discussed. Although specific strategies may vary according to cultural norms or values, studies of the first type regard apology as a universal speech-act, while studies of the other type consider apology as discrete speech-acts of each specific language. With these two points of view as a frame of reference, the various findings of these studies are discussed and several problems remaining for future research are noted.

【Keywords】 apology, Japanese, English, speech act, universality, diversity

(Nara University)